

# 貨幣錯覚における貨幣の名目，実質価値の影響

(How people respond to the changes in nominal and real values in the presence of money illusion?  
-evidence from an experiment in Japan-)

高野 昌也\*

## Abstract

本稿の目的は，貨幣錯覚に陥る個人が貨幣のもつ名目，及び実質価値の変動にいかなる影響を受けるか，を検証することである．仮想質問を用いたアンケート調査は，個人が貨幣の名目価値と実質価値の一定以上の乖離に強く反応すること，及び，名目価値の下落を極端に回避する傾向にあることを示した．

キーワード: 貨幣錯覚，名目収入

JEL Classification Number: E31, J30

## 1 はじめに

本稿では，貨幣錯覚に陥る個人が貨幣のもつ名目，及び実質価値の変動にいかなる影響を受けるか，を検証するため，日本在住の20代以上の男女を母集団として想定し，インターネット上で仮想質問を含むアンケート調査を行った．

貨幣錯覚は，経済主体が貨幣の実質価値，つまり貨幣のもつ購買力のみならず，直接観察可能である名目価値にも影響を

受ける傾向を意味し，個人の経済不合理性を示すものと考えられる．行動経済学の観点から貨幣錯覚を検討したものとして，収入，投資，取引等，様々な経済活動における貨幣錯覚の影響を示した Shafir et al.(1992) をはじめとして，日本において，アンケート調査を実施し，物価変動下での名目所得と消費行動の関係性に着目し，名目所得下落への強い回避性を示した塚原・千田(2006)等がある．

\*慶應義塾大学経済学研究科修士課程 1 年 (fk071304@z6.keio.jp)

そして、市場を想定した経済実験において、貨幣錯覚が均衡価格に影響を与えることを示した Fehr and Tyran(2001) が明らかにしたように、個人のみならず、市場に対しても大きな影響を持ち得る。一方で、物価変動に伴う貨幣の実質価値の変化、そして名目価値、実質価値の乖離が経済主体にいかなる影響を及ぼすか、という物価変動に即した議論は行われてこなかった。そこで、本稿では、物価変動、及びそれに伴う名目価値、実質価値の変動について、複数の状況を想定した仮想質問によるアンケート調査を実施した。その成果として、個人が貨幣の名目価値と実質価値の一定以上の乖離に強く反応すること、及び、名目価値の下落を極端に回避する傾向にあることを示した。

## 2 分析の枠組み

### 2.1 アンケート質問内容

本稿の分析に用いたデータはインターネットリサーチ会社 macromill を通じて、2011年1月6日から1月7日にかけて行われた。対象となったのは、macromill モニタサイト会員の20代以上の男女であり、有効サンプルとして、合計518を得た。ここでの質問内容は Tversky et al.(1997) の枠組みをもとにしたものであり、被験者に対して、特に収入に着目した章末にまとめられるアンケート質問への回答を求めた。設問1では、それぞれ異なる名目収入、

実質収入に直面する A さん、B さんについての選好を被験者に訊ねている。ここで文中の【物価変動パラメーター】については、(4,5,6,7,10,20) のうちのいずれかの値がランダムに表示される。(参考)の表<sup>1</sup>にまとめられるように、A さんは常に同じ名目収入、実質収入を享受する一方、B さんについては、名目収入は常に一定であるものの、【物価変動パラメーター】が大きくなるにつれ、実質収入が減少する。ここで、【物価変動パラメーター】がどの値をとろうとも、A さんのほうが B さんに比べ、実質収入は常に高いから、B さんを選択する被験者は貨幣錯覚の影響を受けていると考えられる。更に【物価変動パラメーター】の変動による B さんの名目収入と実質収入が乖離に対して、被験者の回答にどのような変化するか、つまり貨幣錯覚にどのような影響を与えるかを検討する。設問2では、設問1とは対照的に、物価の下落により、名目収入は下落するものの、【物価変動パラメーター】が大きくなる。つまり物価の下落幅が大きくなるにつれ、実質収入が増加する C さんと A さんを比較する。ここでは、C さんのほうが常に実質収入は高く、A さんを選択した場合、貨幣錯覚の影響を受けていると考えられ、また、ここでも【物価変動パラメーター】の変動に伴う名目収入と実質収入の乖離の回答への影響をみる。

最後に、貨幣の名目価値、実質価値を正しく認識しているかどうかを確認するための質問を設問3として設けた。この設

<sup>1</sup>この表は被験者に対しては表示されない

<sup>2</sup>物価変動による貨幣の実質的価値の変化にナイーブな個人は常に貨幣錯覚を受けていると考えられるが、本稿では貨幣の実質的価値と名目的価値の変化に対する影響をみることを目的とするため、検討の対象とはしていない。

問に対し、正しく回答できていない被験者については、サンプルから除外した<sup>2</sup>。なお、この設問により、貨幣の実質価値についてより強く意識する、アンカリング効果によって、上記二問への回答に影響が生じることを避けるため、この設問は上記二問の回答を完了後に被験者に表示され、それまでの回答を変更することができないよう配慮されている。

## 2.2 データ

アンケート調査は、ネットリサーチ会社 macromill を通して、2011 年 1 月 6 日から 1 月 7 日にかけて行われた。対象とされたのはマクロミルモニタサイトの 20 代以上のモニタ会員であり、有効サンプルとして 518 を得た。このうち、設問 3 への正答率は 77.8 % であり、誤った回答を行ったサンプル 118 が除外され、合計 402 が残った。【物価変動パラメーター】が (4,5,6,7,10,20) の 6 パターン存在するが、これらはサンプルに全てに平等に割り振られ、設問 3 において、サンプルの一部が除外された後も、著しい偏りは生じなかった。

## 3 推定結果

設問 1 については B さん、設問 2 については A さんと回答した場合を「1」、そうでない場合には「0」として、これらを被説明変数【物価変動パラメーター】6 パターンをダミー変数として説明変数として、それぞれプロビット回帰を行った。その結果は章末の Table にまとめら

れる。物価上昇局面である設問 1、下落局面である設問 2 いずれを観察した場合においても、7 % ダミー以降の説明変数から、10 % 有意となる。これは、貨幣錯覚に陥った個人が収入の実質価値、名目価値の乖離が小さい場合においては、その差に反応しないものの、一定以上、両者の差が大きくなった場合に実質収入についても考慮する傾向として反応することを示している。

更に、名目収入が下落する局面における貨幣錯覚の影響は名目収入が上昇する場合に比べて、どの【物価変動パラメーター】をとった場合においても強く、名目収入下落に対する回避性がみとれる。これは塚原・千田 (2006) と整合的な結果である。

## 4 おわりに

本稿では、貨幣錯覚に陥る個人が貨幣のもつ名目、及び実質価値の変動にいかなる影響を受けるか、を仮想質問によるアンケート調査を通して検証した。その結果、名目価値と実質価値の一定以上の乖離に対して、個人が実質価値について強く意識する傾向を示すこと、名目価値の下落について、それを回避する形で反応することを示した。

これからの課題としては、これらを貨幣錯覚を引き起こす一つの要因として考えられるヒューリスティック性との関係性において検討すること、物価の変動が個人に対して与える影響をコントロールし、より頑健に推定すること等が考えられる。

### 設問 1

AさんとBさんは同じ大学を違う年に卒業し、異なる出版会社で同種の仕事に従事しています。

Aさんは一年目、年俸として年間300万円を受け取り、その一年間、物価変動はなく、

二年目に入るにあたって、2% (6万円) の昇給を受けました。

Bさんは一年目、年俸として年間300万円を受け取り、その一年間の間に物価は【物価変動パラメーター】%上昇し、

二年目に入るにあたって、5% (15万円) の昇給を受けました。

二年目に入って、AさんとBさん、どちらのほうがより満足しているとあなたは考えますか。

Aさん

Bさん

### 設問 2

AさんとCさんは同じ大学を違う年に卒業し、異なる出版会社で同種の仕事に従事しています。

Aさんは一年目、年俸として年間300万円を受け取り、その一年間、物価変動はなく、

二年目に入るにあたって、2% (6万円) の昇給を受けました。

Cさんは一年目、年俸として年間300万円を受け取り、その一年間の間に物価は【物価変動パラメーター】%下落し、

二年目に入るにあたって、2% (6万円) の減給を受けました。

二年目に入って、AさんとBさん、どちらのほうがより満足しているとあなたは考えますか。

Aさん

Bさん

### 設問 3

あなたは銀行に預金として1000万円を預け、一年後の現在は利子5%がついて、1050万円になったとします。

一方、物価はこの間に全ての商品に対して、一律で6%上昇しました。

あなたがこの預金全てを使ったとして、ある一つの商品を買うことのできる数量は預ける前と一年後の現在ではどちらのほうが多いでしょうか。

預ける前のほうが多い

一年後の現在のほうが多い

Table

設問 1	係数	標準誤差	P 値	設問 2	係数	標準誤差	P 値
切片	0.036	0.152		切片	1.565	0.243	***
5 %ダミー (実質変化 -1%)	-0.118	0.220		5 %ダミー (実質変化 +1%)	-0.507	0.313	
6 %ダミー (実質変化 -2%)	-0.336	0.217		6 %ダミー (実質変化 +2%)	-0.213	0.325	
7 %ダミー (実質変化 -3%)	-0.406	0.214	*	7 %ダミー (実質変化 +3%)	-0.743	0.295	*
10 %ダミー (実質変化 -6%)	-0.603	0.220	***	10 %ダミー (実質変化 +6%)	-0.999	0.291	***
20 %ダミー (実質変化 -14%)	-0.438	0.225	*	20 %ダミー (実質変化 +14%)	-0.651	0.307	*

(\*,\*\*\*はそれぞれ 10 % , 1 % 有意を意味する.)

A,B,C の名目、実質賃金の変化

	【物価変動パラメーター】	名目分	実質分
A	0%	+2%	+2%
B	4%	+5%	+1%
	5%	+5%	0%
	6%	+5%	-1%
	7%	+5%	-2%
	10%	+5%	-5%
	20%	+5%	-15%
C	4%	-2%	+2%
	5%	-2%	+3%
	6%	-2%	+4%
	7%	-2%	+5%
	10%	-2%	+8%
	20%	-2%	+18%

## 5 引用文献

- E. Shafir, P. Diamond and A. Tversky, 1997, Money Illusion. Quarterly Journal of Economics 112, 341-374.
- 塚原康弘・千田亮吉, 2006. 消費における貨幣錯覚の実証研究. 行動経済学の理論と実証. 勁草書房, 3-14.
- E. Fehr and J.R. Tyran, 2001, Does money illusion matter?. American Economic Review 91, 1239-1262.